和文要旨

ウズベク語における形動詞と動名詞による従属節について

日髙　晋介

1. 背景と目的

本稿の目的は、ウズベク語の動名詞と形動詞の間にある共通点と相違点を明らかにすることである。この問題を取り扱う背景について、次に述べる。

補文節には、形動詞非過去 *V-adigan* による補文節は許容されず、その代わりに、動名詞 *V-(i)sh* が用いられる。(0.1) は、形動詞による補文節が別の述語 *ayt-di-ø*「言った」の目的語項として埋め込まれている文である。ただし、c. の形動詞非過去 *V-adigan* を用いた文は許容されない。代わりに、(0.2) の動名詞 *V-(i)sh* を用いた文が用いられる。

(0.1)a. *A* *B-ga* *[C* *olma-ni* ***ye-gan-i-ni]*** *ayt-di-ø.*
NAME NAME-DAT NAME apple-ACC eat-PTCP.PAST-3.POSS-ACC say-PAST-3SG
「A は B に C がリンゴを<u>食べた</u>と話した (lit. <u>食べたことを</u>話した)。」

b. *A* *B-ga* *[C* *olma-ni* ***ye-yotgan-i-ni]*** *ayt-di-ø.*
NAME NAME-DAT NAME apple-ACC eat-PTCP.PRS-3.POSS-ACC say-PAST-3SG
「A は B に C がリンゴを<u>食べている</u>と話した (lit. <u>食べていることを</u>話した)。」

c. **A* *B-ga* *[C* *olma-ni* ***ye-ydigan-i-ni]*** *ayt-di-ø.*
NAME NAME-DAT NAME apple-ACC eat-PTCP.NPST-3.POSS-ACC say-PAST-3SG
「A は B に C がリンゴを<u>食べる</u>と話した (lit. <u>食べることを</u>話した)。」

(0.2)*A* *B-ga* *[C* *olma-ni* ***yey-ish-i-ni]*** *ayt-di-ø.*
NAME NAME-DAT NAME apple-ACC eat-VN-3.POSS-ACC say-PAST-3SG
「A は B に C がリンゴを<u>食べる</u>と話した (lit. <u>食べることを</u>話した)。」

しかし、形動詞による補文節も動名詞による補文節も「C がリンゴを食べる」という事態を表している。従来の研究では、これらを同一の平面で扱うことはしてこなかった。

そこで、本稿では、形動詞と動名詞それぞれを詳細に記述したのちに、それぞれを比較することで、形動詞と動名詞との間にある共通点と相違点を描き出すことを目的とする。

2. 構成

本稿は、概要 (0 章)、第一部 (1 章、2 章)、第二部 (3 章～5 章)、第三部 (6 章) から成る。

それぞれについて概観する。なお、ここでは、概要 (0 章) については述べない。

第一部

第一部では、**言語概説 (1 章)** を述べた後に、**先行研究のレビュー (2 章)** を行う。2 章では、形動詞あるいは動名詞各々の形式について、先行研究の記述に従って、意味と統語機能を整理する。その後、第二部で分析対象とする形動詞と動名詞を選ぶ。その結果、本稿の分析対象として次の形式を選んだ: 形動詞過去 *V-gan*、現在 *V-(a)yotgan*、非過去 *V-adigan*、未来 *V-(a)r* [NEG: *V-mas*]、行為者 *V-(u)vchi*、動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*]。

第二部

従属節のタイプ別 (**補文節 (3 章)、連体節 (4 章)、副詞節 (5 章)**) に、下記の 2 つの分析を行った。第一に、第一部で整理した統語機能に従って、分析を行った。具体的に言えば、形動詞節および動名詞節が関わる上位節の要素や、当該の統語機能で動名詞および形動詞が果たしうる意味に着目する。特に、前者の、上位要素に着目するという観点は、ウズベク語に関する先行研究において、全く注目されてこなかった。第二に、形動詞あるいは動名詞による節の内部の特徴について、次の 3 つの観点から分析した: 1. 節内部の構成要素 (主格主語、副詞、格を含んだ目的語)、2. 形動詞あるいは動名詞自体が含む形態的な文法範疇 (態、否定)、3. 形動詞あるいは動名詞によるそれぞれの節が表わす時間的前後関係。最後に、第一と第二の分析に基づいて、形動詞と動名詞各々の特性を比較した。ただし、第二の分析 (形動詞あるいは動名詞による節の内部の特徴) については、従属節のタイプによる差はほとんどないため、ここでは特に述べない。

次に、各章の概要を述べる。**3 章 (補文節)** では、上位節述語に注目して分析を行った。その結果が表 1 である。点線より上の上位節述語は、形動詞による補文節も動名詞によるものも取る。一方、点線より下の上位節述語は、動名詞による補文節しか取らない。

表 1: 動名詞あるいは形動詞による補文節を取る上位節述語

上位節述語の意味的タイプ	補文節述語		
	形動詞		動名詞
	過去 *V-gan*	現在 *V-(a)yotgan*	*V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*]
1. 発話を表す述語	○	○	○
2. 命題に対する態度を表す述語	○	○	○
4. 評価を表す述語	○	○	○
5. 知識と知識獲得を表す述語	○	○	○
6. 恐れを表す述語	○	○	○
12. 直接知覚を表す述語	○	○	○
13. 否定を表す述語	○	○	○
3. ふりを表す述語	×	×	○
7. 願望を表す述語	×	×	○
8. 操作を表す述語	×	×	○
9. モダリティを表す述語	×	×	○
10. 達成を表す述語	×	×	○
11. 局面を表す述語	×	×	○

点線より上にある上位節述語では、下にある上位節述語よりも、補文節による事態がいつ実現するかという点に関心がある。一方、点線より下の述語では、補文節による事態の実現には関心がない。したがって、形動詞は事態の実現に関心があるが、動名詞は事態の実現に関心がないと言える。

4 章 (連体節) では、主要部名詞に着目して分析を行った。各形動詞および動名詞に分けて、それぞれの分析結果について述べる。

まず、形動詞について述べる。全ての形動詞は、主要部名詞を直接修飾する。形動詞過去 *V-gan*、形動詞現在 *V-(a)yotgan*、形動詞非過去 *V-adigan* の 3 つの形動詞は、他の形動詞と比べて、多様な主要部名詞を取ることができる。形動詞未来 *V-(a)r* [NEG: *-mas*] は、限られた範囲の名詞しか取らず、固定的な表現か特殊な文体でしか用いられない。そのため、非常に生産性が低いと言える。形動詞行為者 *V-(u)vchi* は、*V-(u)vchi* の主語に相当する名詞だけ主要部に取るが、形動詞未来 *V-(a)r* [NEG: *-mas*] ほど生産性は低くない。

次に、動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] について述べる。動名詞は所有複合による修飾のみ行う。主に、主要部名詞と「外の関係」を持つ。ただし、主要部名詞と統語的な関係にあるように見える場合、動名詞による連体修飾構造全体が 1 つの語彙に近い意味を表す。

5 章 (副詞節) では、3 対 6 つの副詞節に対象を絞り、6 つの節それぞれにおける動名詞および形動詞が果たしうる意味に着目した。

まず、時間先行節「～した後に」と時間後行節「～する前に」について述べる。時間先行節では、上位節による事態が起こる瞬間に、従属節による事態は実現し、そして完了している (Cristofaro 2003: 159)。時間先行節には、形動詞過去 *V-Gan* のみ用いられる。したがって、形動詞過去 *V-gan* による事態は、上位節による事態に先行し、かつ上位節事態より前に完了することを含意していると言える。一方、時間後行節では、従属節による事態は、上位節に

よる事態よりも時間的に後行し、上位節による事態が起こる時には実現していない (Cristofaro 2003: 159)。時間後行節には、形動詞未来否定 *V-mas*、動名詞 *V-(i)sh*、動名詞否定 *V-maslik* が用いられうる。したがって、動名詞 *V-(i)sh* による事態は、上位節による事態の後に起こり、かつ動名詞 *V-(i)sh* は事態の実現には関心がないと考えられる。否定形式 (形動詞未来否定 *V-mas*、動名詞否定 *V-maslik*) については、時間後行節が表わす事態が実現していないために、これらの否定形式が用いられると考えられる。

次に、目的節「～するために」と原因節「～したので」について述べる。目的節と原因節には、「目的節は、主節時において*未実現*であるに違いない、動機づけを行う事態 (motivating event) を表す。一方、原因節は、主節時において*実現*されうる、動機づけを行う事態を表す」という違いがある (Thompson, Longacre and Hwang 2007: 250)。この指摘に従えば、形動詞 (過去 *V-Gan* および現在 *V-(a)yotgan*) は原因節でのみ用いられるため、これらは実現されうる事態を表すと言える。実例を見ると、「実現されうる」というより、上位節時までに「既に実現した」事態 (過去 *V-gan* による) あるいは上位節時に「実現中の」事態 (現在 *V-(a)yotgan* による) を表していると言える。他方、動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] は原因節と目的節の両方で用いられる。したがって、事態が実現するかどうかという点に関しては、動名詞は中立であると見なせる。

最後に、時間節「～時に」と条件節「～ならば」について述べる。ここでは、過去形動詞＋処格 (*V-gan-da* [V-PTCP.PAST-LOC]) の例に注目する (ただし、時間節には、形動詞現在 *V-(a)yotgan*、動名詞 *V-(i)sh* も用いられる)。本稿では、*V-gan* による時間節および条件節が 2 点の特徴を持つことを明らかにした: 1. 一回的な事態を表すこと、2. *V-gan* 節による事態が上位節による事態よりも時間的に先行すること。さらに、全ての抽出例が、a.～c. の 3 つのいずれかのパターンに当てはまることも明らかになった: a. *V-gan* 節と上位節による両事態が実際に実現された場合、b. *V-Gan* 節と上位節による両事態の実現を話者が想定している場合、c. 反実仮想を表している場合。エリシテーション調査の結果から、上記 1. と 2. に当てはまらない節の述語、あるいは、上記 1. と 2. には当てはまるが a. ~ c. のいずれにも当てはまらない節の述語には、定動詞条件形 *V-sa* が用いられることが明らかとなった。したがって、過去形動詞＋処格 (*V-gan-da* [V-PTCP.PAST-LOC]) は、本来的には時間節で用いられると言える。

第三部

6 章では、結論と今後の課題を述べた。第一に、結論について述べる。本稿では、統語機能以外にも、動詞性と、上位節との時間的関係に注目して、形動詞と動名詞を比較した。まず、動詞性に着目する。本稿での調査によって、動詞性が高い、つまり定動詞文に近いふるまいを見せるのは、形動詞過去 *V-gan*、現在 *V-(a)yotgan*、非過去 *V-adigan*、動名詞 *V-(i)sh* であり、一方、動詞性が低いのは、形動詞未来 *V-(a)r* [NEG: *V-mas*] と形動詞行為者 *V-(u)vchi* であることが明らかとなった。特に、形動詞未来 *V-(a)r* [NEG: *V-mas*] は、主語、副詞、対格目

的語も持てず、それ自体には態接辞あるいは否定接辞を含むこともない。

次に、上位節との時間的関係に着目する。本稿での調査によって、先行研究で述べられているように、形動詞 (過去 *V-gan*、現在 *V-(a)yotgan*、非過去 *V-adigan*) はそれぞれが異なる時間的な関係を表していることを確認した。しかし、形動詞非過去 *V-adigan*、形動詞未来 *V-(a)r*、形動詞行為者 *V-(u)vchi*、動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-maslik*] は、時間的な関係を表さないという特徴を持つことも明らかとなった。したがって、本稿では、形動詞と動名詞は、明確に二分できるものではなく、連続体を成していると結論づける。

第二に、今後の課題について述べる。本稿には、次の 3 点に関して課題が残った: ①研究方法、②歴史的な発展、系統的な起源、地域的な広がりに関する考察、③通言語的な「形動詞」と「動名詞」に関する議論。